

ご縁がありまして、「エフエム八ヶ岳」のラジオ番組に出演させていただきました。出演するにあたって、普段私共が携わる「木造建築」について、自分自身の思いをまとめる良い機会にもなりました。

ナビゲーターの草苺さんが、出演時の言葉一字一句全てを、文章で再現した冊子を下さいましたので、その文章をここで使わせていただきます。

田空間事務所 関 謙二

## 『エフエム八ヶ岳 北の杜と仲間たち』

「昼ナビ」 3月18日（木）12:00～12:15

ナビゲーター： 草苺 義子さん

タイトル：「木造建築の美しさ — 精度を追求し、完成させた日本人。」

その木造建築の知恵を引き継いでゆきたい」

草苺：関さんこんにちは。よろしくお願いいたします。

関：こちらこそ、よろしくお願いいたします。

草苺：先月、障害者の就労を支援している中山靖子さんの「夢屋」のお話をお伝えしましたが、その「夢屋」を古民家の材料を生かして建てられたのが関さんでした。その「夢屋」を造るにあたり、古民家の材料を用いてどのような建物にしようとお考えでしたか？

関：中山先生も仰られた通り「夢屋」は平成18年5月に放火によって焼失しました。5年前になるのですけれど、その1年前に、私達はもうひとつの建物である「ほっと夢屋」という建物を造らせていただきました。これは、15坪程度の障害者の作業所だったのですけれども、その時、中山先生を知る多くの方々ですね「物心両面」にわたる協力を頂いたんです。使わなくなった、例えばですね「障子、襖、流し台、下駄箱等」色々物を頂きました。これを「ほっと夢屋」さんに使用した訳ですけれども、これが、私にとってですね、初めて「夢屋」さんを知った時でした。

私達もですね、色々民家再生とか、修復等を手掛けてきましたので、いらなくなった「古材とか、建具とか」捨ててしまうにはもったいない物がいっぱいありまして、会社に残しておいた訳です。

そんな過程を踏む中でですね「夢屋」さんに集う皆さんの温かい気持ち、それから、古い物でも大切に利用する皆さんの気持ちをですね、端的に表現できるものとして、古材利用を考えた訳です。

草薙：木造建築の良さはどんなところですか？

関：今私達のやっている木造建築は、どちらかと言えば、伝統工法によるものが多いです。伝統工法で特に大切なのはですね、手仕事を覚える中で、若い頃に早く、「墨付け」から始まり「仕口の加工」「継手の加工」等を体で覚えてしまうことなんです。それが、まあ、ひいてはですね、日本の木造建築の1000年以上に渡る歴史を紐解く鍵になると思っています。

100年前の大工さんの腕前を知るにも、やっぱり、この訓練が出来ていないと解りません。

200年前の大工さんの常識となりますと、またちょっと違いまして、今の大工さんたちのように、四角の物の、四角の柱を真っ直ぐ建てるという発想ではない訳ですよ。例えば、柱が曲がっていてもそれでもいいと。で、壁がそれに曲がって塗られていても、全然構わない時代もあるんですね。

そういうものを見ると、木造がいかに違う観点で建てられてきたかということも解りますし、建物の面白さを、知ることにもなると思います。

草薙：何時頃から、民家再生や寺社建築をお考えになられたのですか？

関：私は、6年前に寺社を手掛けている会社を辞めまして、独立した訳ですが、今から20年程前、その会社で、古い建物の改修や補修に携わりました。例えばですね、「90センチの檜の大黒柱をいくつも持つ庫裏」の改修ですとか、「総檜造りの山門」の改修など。江戸時代より、3回も移築再生を繰り返されて、その地で建てられていることも知りました。

そういう建物を如何に残して、次の世代に伝えることが大切かということも、その時痛感した訳です。

それ以来、古い建物を取り巻く、その地方地方の、特色の現れた風景を見に行くことが多くなりました。

草薙：古民家を守ろうと思われたのは、どうしてですか？

関：私が、たまたまですね、NPO法人の民家再生協会という会に入っていて、実は、その会で、2001年に農林水産省が中心となりまして「萱葺民家調査」というのを行いました。それに参加した時の記録なんですけれども、今、各県に残っている萱葺民家っていうのは、一番保有数の多いのは福島県です（4241）。次が長野県でした（3770）。まあ、長野が広いという条件もありますけれども、長野、兵庫（2928）、広島（2838）、新潟（2466）と続いていくんですけど、山梨県については、13番目でした。私達も、有名な塩山地方の「突き上げ屋根」とか「切り上げ屋根」と言われる建物を見に行ったんですけど、やはり、素晴らしい大きな建物がいっぱいありましたね。

私達は、冬の「小谷村」を中心に調査したんですけど、その時、面白い話を聞きました。

それはですねー、ひと冬萱葺民家を空けてしまうと、その周りの雪解けが遅

くなるということなんですよ。

それに並行しまして、美しい棚田や、畑も荒れてしまうということで、日本のですね、山里の風景が、まあ後、数十年後には無くなってしまいうんじやないか、という危機感を持ちました。

それが守ろうと思ったきっかけです。

草薙：関さんは、かつて、立派な栗の木で建てられていた「蔵」の材木の全部を引取られたそうですが、その立派な「蔵」の解体を、どのような思いで作業なさったのですか？

関：実は「蔵」の解体の話は、大変多く寄せられます。でも、「貰い手」が見つからないのが現実なんですよ。

私がたまたま解体した「蔵」は「総栗の蔵」で価値は大変あるものなんです。これを解体した時ですね「貰い手」がありませんでした。まあ、「明日は産業廃棄物になる」という矢先に、私達が意を決して貰うことにしました。それからですね、3年間も行き先が決まらないまま、会社の中の倉庫に眠っていたんですけれども、これがやっぱり、古民家の現実というかね、そういう風になっていかざるを得ない実情なんですよ。

こうした古民家の再生についてはですね、やっぱり、いつも考えているのは、人と人の不思議な縁がないと、なかなか「貰われ手」が無いということです。「この蔵」についてもですね、たまたま「貰い手のご両親」が、この蔵の近所のご出身ということで、大変親近感を持たれたことがきっかけとなって、貰っていただけるようになりました。

草薙：木材について、お話を伺いたいと思います。

「木は、何年経っても生きている」と実感したのは、どんな時ですか？

関：私は今「木曾のヒノキで家をつくる会」の運営委員をしているのですが、1年を通して色んなイベントを行っています。例えば「森林セラピー」についてとか、「実際にヒノキの間伐を体験」してみるとか、「ヒノキの強度試験」をしてみるとか、色々なことをやっていますが、その中で、「ヒノキの強度」について、ちょっとお話をしたいと思います。

ヒノキが切り倒される前というのは、人間と同じように地球上の大気圏内で、既に80年から300年くらい生きていますけれど、切り倒された時を人間に例えて0歳とすると、その時から人生が始まる訳ですね。

ヒノキの強度はですね、200年から300年で一番強度を増し、人間でいえば、一番働き盛りの20歳から30歳になります。それ以後ですけれど、ゆっくり年をとって、強度もゆるやかに落ちていきます。ですから「ヒノキ」の家を建てるということは、200年から300年は「十分持ちますよ」という事になります。

それに比べて、広葉樹の代表的な「樺」を例にとりますと、生まれた時は「ヒノキ」の約2倍の強さを持っています。しかし「ヒノキ」と違うのは、毎年

老化が進みまして、そうですね、500年から800年で「ヒノキ」に抜かれてしまうのです。

木は、人間の生きてる単位の約10倍長生きな訳ですけども、単位があまりにも大きすぎて、人間にはピンときません。それだけ長生きをするということですね。

草薙：最後になりますが、関さんのこれからの夢は何ですか？

関：そうですね、まあ、小さい夢なんですけれども、私達のスタッフが細々でも生活出来ることが、先ずは、夢の片隅にありますけれども。建築に関して申し上げますと、先人達の1000年に渡る、木造建築の知識と技術は、今の社会状況の中では、なかなか残しにくくなってきています。

その中で、何とか、私達なりに先人の意図を学びながら、その上にですね、平成の時代に「何のために私達が生まれてきて、生きていくのか」ということを、付け足すことができたと思います。

それから、JR信濃境駅の近くに、高森観音堂（弘法大師堂）というお堂があります。そこは、250年経った枝垂れ桜がありまして、綺麗な花を付けます。

そこで、移築民家の体験会を開きます。4月17、18日、丁度お花見が出来る頃なので、そこで「野点の茶会」をしていますので、ぜひ、古民家を見学に来ていただければと思います。

草薙：ありがとうございます。ぜひ伺いたいと思います。

今日は、木造建築の美しさと精度を追求し、古民家の再生を手掛けて居られる、関さんにお話を伺いました。